

## 寄贈作品（5点）

1



- 作家名** 木村盛和（きむら・もりかず）  
**作品名** エメラルド釉窯変結晶茶盃（えめらるどゆう ようへんけっしょうちゃわん）  
**制作年** 2012年  
**寸法** 高さ 8.5cm 口径 14.7cm 高台径 5.3cm  
**備考** ・「作陶 74 年記念 卒寿 木村盛和展」（2012 年、高島屋京都店・大阪店）出品  
・高台内「盛和」印銘あり  
・付属物：箱(箱書きあり)、二重箱、布

### 作品の評価

木村盛和(1921-2015)

1921 年 京都市にて清水焼陶工の長男として生まれる。

1937 年 商工省所管陶磁器試験所入所。鉄釉(天目釉)の研究に従事。

1955 年 日本工芸会の発足に参画する。56 年から 76 年まで日本伝統工芸展に出品。

1962 年 プラハ国際陶芸展で佳作賞受賞。

1964 年 日本陶磁協会賞受賞。

1976 年 福井県丹生郡越前町に移住。小倉見窯を構える。

1986 年 福井県文化賞受賞。

2000 年 福井県陶芸館名誉館長に就任。

本作は木村自ら最高の出来と自負した、エメラルド釉の茶碗である。大ぶりの茶碗の見込みから口縁にいたるまで、器面全体に結晶が現れている。結晶一つ一つの輪郭がはっきりしており、宇宙に浮かぶ星のごとく結晶が光を反射する様子は見事である。窯の中の一瞬の変化を捉えることに生涯をかけた、木村盛和畢生の作といえる。



- 作家名** 十六代樂吉左衛門 (らくきちざえもん)  
**作品名** 赤茶碗 (あかちやわん)  
**制作年** 2021年  
**寸法** 高さ 10.0cm 口径 10.8cm 高台径 5.2cm  
**備考**
  - ・「十六代 襲名記念 樂吉左衛門展」(2021年、於高島屋京都店・日本橋店)出品
  - ・高台脇「樂」印あり
  - ・付属物：箱(箱書きあり)、布(「樂」印あり)

### 作品の評価

十六代 樂 吉左衛門(1981-)

1981年 十五代 樂 吉左衛門の長男として生まれる。

2008年 東京造形大学彫刻科を卒業。

2009年 京都市伝統産業技術者研修・陶磁器コース修了。

2010年 イギリスに留学。

2011年 樂家の継嗣として作陶に入る。

2019年 十六代 樂 吉左衛門を襲名。

2021年 襲名記念初個展を開催。

十六代吉左衛門は東京造形大学彫刻科を卒業、イギリス留学を経て樂家の作陶に入り、2019年に樂家当主を継いだ。本作は襲名記念展に出品された赤樂茶碗である。器形は筒状に近く、薄くゆがみのない口づくりや張りの強い腰、胴に対しやや小さめの高台が特徴である。洗練されたかたちに対し、片身がわりのような大胆な釉景が対照的である。



- 作家名** 峯岸勢晃 (みねぎし・せいこう)  
**作品名** 月白青瓷茶碗 銘 飛翔 (げっぱくせいじちやわん めい ひしょう)  
**制作年** 2021年  
**寸法** 高さ 9.8 口径 11.2 高台径 4.5cm  
**備考**
  - ・「窯変米色青瓷 峯岸勢晃 青瓷展」(2021年、於やまに大塚) 出品
  - ・高台脇「勢」刻銘あり
  - ・付属物：箱(箱書きあり)、陶歴、布

### 作品の評価

峯岸 勢晃(1952-)

1952年 埼玉県三郷市生まれ。

1972年 長野県小布施の奥信濃焼にて修行。

1973年 茨城県笠間・栃木県益子にて修行。

1982年 粉引、三島、刷毛目を発表。

1988年 青瓷を焼成。

2000年 日本工芸会正会員となる。

2017年 窯変米色青瓷を発表。

現在 栃木県那須町にて作陶。

峯岸勢晃は笠間や益子で修行し、現在は青瓷を中心に手がけている日本工芸会正会員の作家。波打つような口づくりと、独特な釉のかかり方によってあらわれる曲線美が魅力的な茶碗である。月白釉とは乳白色に白濁した青い釉薬のことで、月光のような色合いからその名がついており、大きく入った貫入も見どころの一つである。



- 作家名** 古谷宣幸 (ふるたに・のりゆき)  
**作品名** 《黄天目茶盃》 (きてんもくちやわん)  
**制作年** 2021年  
**寸法** 高さ 9.0cm 口径 11.5cm 高台径 4.5cm  
**備考**
  - ・「古谷宣幸展」(2021年、於日本橋高島屋)出品
  - ・高台脇 刻銘あり
  - ・銀覆輪あり。一度白化粧したのち、チタン・鉄を含有する釉を施す。

#### 作品の評価

古谷宣幸(1984-)

1984年 滋賀県甲賀市信楽町生まれ。

2005年 京都嵯峨芸術大学短期大学部陶芸コースを卒業。

2007年 中里隆に師事。アメリカ・コロラド州アンダーソンランチアートセンターにて作陶。  
滋賀県立陶芸の森レジデンスアーティスト。

2008年 デンマーク・スケルツコーにて作陶。

2015年 アンダーソンランチセンターにゲストアーティストとして招待される。

現在 信楽にて作陶。

古谷宣幸は京都嵯峨芸術大学短期大学部を卒業後、唐津焼の中里隆に師事し、現在は薪窯による天目の制作を行っている。本作も穴窯焼成によるものであり、端正なかたちの茶碗に天目釉としては珍しい、黄色の釉薬が施されている。素地に使われた黒土にツヤのある山吹色の黄天目釉が映え、美しい仕上がりとなっている。



- 作家名** 羅森豪 (Lo Sen Hao らしんごう)  
**作品名** 木葉天目茶碗 銘 菩提 (このはてんもく めい ぼだい)  
**制作年** 2019年  
**寸法** 高さ 7.0cm 口径 11.8cm 高台径 4.0cm  
**備考**
  - ・「日台交流 林恭助 羅森豪 天目展」(2019、於日本橋三越)出品
  - ・高台内 国名あり
  - ・付属物：箱(箱書きあり)、陶歴、布

#### 作品の評価

羅森豪(1965-)

1965年 台湾生まれ。

1984年 国立台湾芸術専科学校進学。釉薬および窯炉学など専門課程を学ぶ。

1990年 ドイツ国立シュトゥットガルト造形芸術学院陶芸研究所に進学。

1993年 帰国。国立台北教育大学に陶芸課程を開設。芸術学科主任及び研究所所長を担当。

以後、台湾およびアメリカ、ドイツなどで個展多数開催。

2019年 日本橋三越にて「林恭助 羅森豪二人展」開催。

羅森豪は天目の作品を中心に手がける、台湾の陶芸家。木の葉天目はもともと桑の葉が用いられる場合が多いが、本作では仏教とゆかりの深い、菩提樹の葉を用いている。釉調は胴から口縁にかけて、黒から赤みがかかった茶に変化しており、見込みに焼き付いた葉が青く浮かび上がる様が美しい作品である。